随筆IV　H記・芸能

随筆 IV

日記・芸能

福原麟太郎著作集 8

麟太郎著作集 8
IV 日記・芸能
四十四年十月十日 印刷
四十四年十月十五日 発行
定価 一、三〇〇
著作者 福原麟太郎
発行者 小酒井益蔵
印刷者 小酒井益三郎
印刷所 研究社印刷株式会社
発行所 研究社出版株式会社
郵便番号一六二
東京都新宿区神楽坂一の二
電話東京(二六九)四五二一(代表)
振替東京 八三七六一
(乱丁・落丁本はお取替え致します)

© R. Fukuhara

目次

日記

クリスマス前後(昭和四—五年)……三
二月(昭和六年)……一三
ラジオと寝床(昭和八年)……一七
とし(早春日記——昭和十四年)……二〇
暑中日記抄(昭和十四年)……二四
昭和二十年の日記……二九
静かに生きる……二九
水無月……五五
つぎの月……六四
葉月……七八

その一週間……九二
その後の日々……九七
好き日々のこと……一〇九
某月某日(昭和二十七年)……一〇九
小春日和……一一〇
午年の男の日記(昭和二十八年)……一一二
某月某日(昭和二十九年)……一一三
九月一日の記(昭和三十一年)……一一四
某月某日……一一六
能の日記(昭和三十二年)……一一八
土曜日曜(昭和三十五年)……一二〇
読書日記(昭和四十三年)……一二三
読書のひととき……一二七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

芸能

1

チャップリン……一三三
『いがみあい』……一三五
『ビター・スウィート』……一三七
『屋上』……一三九
劇壇一斑……一四四
ロンドン勧進帳……一四九
イギリスの芝居……一五三
『ハムレット』……一七二
日本の芝居……一七五
能……一七八
寄席……一八一

役者年代記……一八五
能　楽……一八八
謡曲の魔術……一九二
沙翁劇三十年……一九六

2

歌舞伎の運命……二〇五
英国劇と諷刺——サヴォイ・オペラ……二一〇
イギリス映画……二二二
　二つのイギリス映画……二二三
　更に二つのイギリス映画……二二六
詩人イプセン……二四二
或る町の謡曲の歴史……二四五
能楽の美しさ……二五〇
三人吉三……二五五

ミカド……二五六
軍艦ピナフォア……二六〇
東京版『ヴェニスの商人』……二六七
『雪』……二七〇
文化人になった能楽師……二七三
仕舞……二七五

3

上演された『マクベス』……二七七
デイム・イーディスのこと……二八〇
『夏の夜の夢』……二八七
叛逆の時代……二八九
オセロとイアゴー……三〇三
忘れ得ぬ断章……三〇六
『十二夜』……三一〇

狂言のこと……三二五
助高屋高助……三二七
四月はシェイクスピア……三三〇
世阿弥生誕六百年……三三四
世阿弥記念能……三三八
シェイクスピア劇の記憶……三三〇
『聖女ジャンヌ・ダーク』……三三四
世阿弥六百年……三三七
北州千年寿……三四〇

4

女性像・母性像……三四四
騒音を楽しむ……三四八
舞台の記憶……三五三
デイム・イーディス近聞……三五八

『トム・ヂョーンズの華麗な冒険』……三六二
歌舞伎芝居好き……三六五
喜劇を観る楽しみ……三七一
文芸座と新劇……三七九
鴈治郎のはたらき……三八三
国立劇場ひらく……三八七
芸能人の洪水……三九二
新劇と新人……三九六
俳優修業注文状……四〇一
学生演劇……四〇五
見物の立場から……四一〇
照葉狂言以降……四一五
生命を掘り起すために……四一八
二十数年のむかし……四二一

評伝『コングリイヴ』

序……四二七
一　アイルランド……四二九
二　『忍草』……四三八
三　『独身老人』……四五〇
四　『二枚舌の男』……四七一
五　『恋は一つ』……四九二
六　「ヒウマー論」……五一〇
七　『喪に服せる花嫁』……五一八
八　コリヤー論争……五二八
九　『世間道』……五四二
十　キーリーへの書簡集……五五八
十一　モールブラ女公爵……五七六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

年表……五八四
参考書目……五八七
著者年譜・著作目録……五九一
あとがき……六二九
掲載紙誌一覧表……六四〇
著者（昭和三十五年）　対本扉
イーディス・エヴァンズ舞台写真　対三五四
ナイヂェル・プレイフェア舞台写真　対三五五

日

記

クリスマス前後（昭和五年）

クリスマスだ。大抵いつも同じ家へいって昼食を取る。自分でも智慧がないと思いながらも、慣れたところへいって、毎日また大抵同じものを食べている。困りながらメニウを読む必要がないからである。実際万事ものぐさになって、ロンドンの空のごとくどんよりしている。その行き慣れた食堂ではそのどんよりしたロンドンの空気を明るくしようとするのか十数人の音楽手どもが隅っこに陣どっていて、ほとんどのべつ、ぶかぶかどんどんをやっている。ビフテキかなんか食べながら、それを聴いていると、クリスマス近くなってからは、何とかするとすぐ、「オウルド・ラング・サイン」だの「ホウム・スウィート・ホウム」だのをやっている。

町通り軒並飾窓にクリスマス贈品が並べられ、サンタ・クロースだの、雪の積った窓だのが、そこにもここにも見られるようになってから気候はめっきり寒さを増した。老人は白い息を吹き、風邪をひきたくない女達は脚絆をはいて臆面もなく歩き、赤ん坊はゲートルとズボンの組み合わさったoverall-leggingsとかいうもので何時もは裸の脚を護られ、それからなおもクリスマスが近づく

と、彼らの手には、風呂敷包みを用いない国民どものことであるから、糊張りの大きな紙袋の中へ紐をとおした包みが、いくつも見られるようになってくるのである。つまり年の暮だ。散髪でもして来ようと、これもロンドンへ来た初めから行っている床屋へ下りてゆくと、――というのは大きなビルディングの地下室なので――親爺がいかにも年の暮らしい顔をしている。「旦那ことしのクリスマスの天気はどんなもんでござんしょう」と、爺さんやけに私の頭へシャムプーをふりかけながら、お目出度がっている。

涼しくなった首へ外套の襟を立てて、郊外のわが宿へ帰ってくると、活動小屋を建築中の板囲いに、ドルアリー・レイン座でやるパントマイム *The Sleeping Beauty* と、ライシアム座でやる *Puss in Boots* との大きな広告が薄くかかった霧の中に泛っている。二、三日すると *Peter Pan* が聖ヂェイムズ座で、*Treasure Island* がストラント座で、それから *Jack and Bean-Stalk* というお伽劇が Children's Theatre という、汚い「子供座」で上演されると、新聞に出始めた。

何といってももうクリスマスである。ロンドン大学キングス・コレッヂ文学部長サー・イズレール・ゴランツ先生も、今日はもう最後の時間だから、講義はよして参考書の話をしよう、それから君達の質問をきこう。ところでまず、テクストを少しは読まなくちゃいけない。みんな Old English 知ってるはずですね。え？　知っていますか。知ってるはずだがな。初歩、ほんの初歩ぐらい

は知っている、え、そうでしょう。——と、すっかり男女とりまぜ数十人の有為なる学生どもを手玉にとって喜んでいる。断髪の娘さん達も、ゴルフ用プラス・フォアを一着に及んだ粋な男学生諸君も、ただにやにやしているばかりである。勇気のあるフランスの青年が、「先生 Legouis 氏の古代英文学史はどうですか」という。老先生「そう、君どう考えますか。どうもフランス人には英国の古い時代の文学は解りかねるようだね。どうもちぐはぐでいけない。見当が違う。レグウィは私は良いと思いませんね。」

その頃に山田巌氏と松山高校の矢野万里氏とがアメリカへ立って行かれた。見送りにいったウォータールーの停車場で、京城大学の中島文雄氏が、いっしょに南の方へ旅行しないかと言う。早速賛成、三日ばかりロンドンを空にした。ボーンマスからプールそれからウェイマス、ポートランドと海岸づたいに二晩どまり浪の音をきいて引き返して、ドーチェスターへ来て、ハーディの住んでいた邸宅 "Max Gate" などを眺めて、帰ってくると、ロンドンはますますクリスマスに近づいている。人並みに私もクリスマスの贈物をしなければならない。週刊誌に現われる随筆なんか読んでみると、クリスマスの贈物は、珍しくって非実用的なもので、貰った人をあっと言わせるものというのが英国人の趣味である。この時ばかり彼らは浪費的な人種になると書いてある。しかしそんなのを選むのは面倒くさい。それでもと思って日本人の商店へいって Xmas プレゼント用日本美術

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com